



兵庫県立歴史博物館特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」に携わって考えたこと（〈特集Ⅱ〉同時代史としての震災展示：兵庫県立歴史博物館特別展を通して）

原岡，千紘

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:98-105

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505415>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505415>



兵庫県立歴史博物館特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」に携わって考えたこと

原岡 千紘

はじめに

本稿は、兵庫県立歴史博物館特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる―情報と通信の1990年代―」（以下、本展）に学生として携わった経験を記すものである。阪神・淡路大震災から三〇年という節目に開催された本展は、「情報」という、今まであまり触れてこなかった切り口をテーマとした展示であった。震災当時の新聞での取り上げられ方やテレビの放送、混乱のなか情報がどう伝えられたか、また、体験を今後どう伝えていくかに焦点が当てられた。

以下では、私たち神戸大学文学部の学生が授業（ゼミ）の環境として携わった展示部分を中心に、展示テーマの決定や資料の調査・読解から選定に至る過程を紹介し、続いて展示につい

ての筆者の感想や展示に携わった所感などを述べていきたい。

なお、以下で展示資料について言及する際、出典等は特に注記しないこととする。本展の出典目録や図録を適宜ご参照頂きたい。また、展示から時間をおいての執筆となったため、展示の概要や資料の解説にあたっては図録¹⁾を多く参照した。

一 展示の内容決定に至るまで

（一）本展の構成と学生担当部分の概要

本題に入る前に、まず展示内容について簡単に触れたい。本展は、第一章「情報と通信の1990年代」、第二章「被災地を伝える」、第三章「必要な情報を伝える」、第四章「体験を伝える」の四章構成であった。このうち、私たち学生が携わった第三章と第四章について概要を示したい。

第三章では、ボランティアによる情報発信や支援など、生活再建に向けた動きや行政の復興計画への市民の反応が窺える資料が展示された。被災地では多くのボランティアが活躍し、衣食住といった生活に関わる重要な情報を提供したが、本展では長田区・中央区・灘区・東灘区の各地域で活動したボランティア団体の様子が資料を通して紹介された。当時、外国人が神戸市内で最も多く住んでいた中央区では、外国語（中国語、韓国語、英語等）で情報を伝えるミニコミ紙がボランティア団体によって作成され、また、学生の多かった灘区では彼らを主体とするボランティア団体が、小回りの利くバイクや地域を歩くことで情報を集めたりするなど、地域によって特色のある活動を行っていた。それらの活動は、震災直後の避難所や物資の支援に注力した段階から、担い手が少なくなるなかで活動をどう続けていくかといった課題に直面するなど、時期の観点から特色を窺うことができた。さらに復興のなかで、神戸空港をはじめとする行政の政策が当時の市民にどう受け止められたかが資料によって示された。

第四章では、震災の体験を次世代へつなぐ事例が紹介された。震災の被害を戦争と重ね合わせた詩や、被災地で撮られた多くの写真、震災の様子を描いた絵や本、手記など様々な媒体を通じて多様な体験が記録され、いまに伝えられていることが示された。

（二）ゼミを通じた展示テーマの設定

では、このような展示内容に至るまでの経緯について、ゼミでの議論を中心に述べたい。ゼミではまず、博物館側から提示された「情報」という切り口を踏まえ、阪神・淡路大震災について、どのような展示内容が考えられるか、学生個々人の関心にも基づきながら意見を出し合った。その結果、それぞれの問題関心に応じて参加学生を三班に分けて議論し、ボランティア（A班が担当）、神戸空港建設をめぐる復興政策の検証（B班が担当）、震災経験の伝え方（C班が担当）の三つにテーマが絞られた。

このテーマ設定と班分けにあたり、大学二回生のときにゼミで触れたことのある「灘ボランティア」に着目したいと考えていた筆者は、A班の一員としてボランティアについての展示を担当することとなった。しかし、大まかなテーマは決定したものの、さらに詳細を各班で検討していく必要があった。A班の話となるが、当時活躍したボランティア団体は数多く存在し、神戸大学のある神戸市灘区に限定しても五団体ほどが活動していた。特定の団体のみに焦点を当てるのか、地区を決めるのか、限定するにもその基準はどうするかなど様々な観点で展示内容が検討された。まずは私たちの住む神戸市に限定して、どのような団体があり、どのような資料が残されているのかについて、神戸大学附属図書館震災文庫などを利用しながら調査した。地

域や時期により様々な活動を行っていたボランティア団体全てを把握することは難しく、最終的には団体の規模、資料の残存数やアクセスのしやすさ、活動の時期の観点から長田区・中央区・灘区・東灘区からそれぞれ一団体を採り上げることになった。筆者の所属していたA班の話が中心となってしまったが、テーマが決定してからも何を掘り下げるのかなど、さらに調査や議論を重ねることで、ようやく内容が固まっていた。

二 展示資料の選定から解説文の作成へ

本節では、展示テーマが決まった後、実際に展示する資料や解説文が固まるまでの過程について、筆者が担当した部分を中心に振り返りたい。

(一) 構想の転換と展示方針の決定まで

前節で述べた通り、ボランティアの展示を担当するA班に所属した筆者は、当初の関心のとおり「灘ボランティア」の資料を扱うことになった。大学二回生のときのゼミでこの資料を扱った際、筆者はボランティアの活動引き継ぎに注目して資料検討を進めていた。というのも、灘ボランティアを含む複数の団体は、四月の新学期・新年度に合わせてボランティアの参加人数が減少することを見越し、三月頃から活動の窓口を行政に引き継いだこと

が、残された資料から読み取れたからである。この印象が強く残っていたため、筆者は今回のゼミにあたり、当初はボランティアの活動「引き継ぎ」を前面に推した展示を構想していた。

しかし、当時の状況を知る方のお話を伺い、資料を読んでいくなかで、灘ボランティアは制度化された活動ではなく、「人に仕事が付いてきていた」活動だと認識を改めた。つまり、被災者のニーズを聞き出すなかで、ある人がこの仕事・活動が必要だと思い、仲間に声をかけることで活動が始まったという当時の特徴に気づかされたのである。これは現在の組織的な活動とは異なるものであり、展示を通して学生ボランティアならではの特徴を伝えたいと思に至った。

この過程で、筆者は展示資料として当初考えていた活動「引き継ぎ」に関する文書のほか、灘ボランティアの活動の変遷を伝える「灘ボランティア新聞」を加えることにした。この「新聞」は、活動のなかで得られた情報から、被災者が必要としていると思われる情報を選び出し、定期的に発行されたものである。紙面からは、必要とされた情報が多様に変化したことを読み取ることができ、その変化こそが被災者のニーズに寄り添ったボランティアの姿勢を反映していた。こうして、筆者としては灘ボランティアの活動を幅広く紹介するような形で、活動の「引き継ぎ」文書と「新聞」の二点を展示する方針をいったん定め、ゼミで報告した。

その際のゼミでは、灘ボランティアの特徴をより印象付けられる資料について議論がなされた。そこで出されたのは、幅広く活動を紹介する方法より、学生ボランティアならではの「勢い」を前面に出した展示にしたほうが興味深いとの意見であった。これを受け、筆者は展示資料の再検討を迫られることとなった。

残された資料からボランティアの「熱意」をどう汲み取り、どのように伝えるか、このことは「灘ボランティア」を採り上げる意義を明確にする作業でもあった。作業を重ねていくなか、筆者の関心は、灘ボランティアの実働部隊として被災地の情報を丹念に収集していた「歩き隊」や「バイク隊」の活動に向いていった。また、「灘ボランティア新聞」の継続調査を通して、最初はまちまちだった発行団体名や新聞のタイトルが次第に統一されていくことも判明した。これらの事実を突き合わせることで、「情報」に視点を置きつつ、学生ならではの熱意と行動が先行し、秩序や「型」が後から定まるという当時の活動の様子を表わせるのではないかと考えた。これにより、実働部隊の資料と新聞を展示の主軸にすることが定まったが、その一方で当初の活動「引き継ぎ」に関する文書は展示資料から外さざるを得なくなった。

（二）展示資料の具体的選定と視覚情報の活用

次の課題は、展示資料の具体的な選定であった。ゼミでは視

覚情報をも組み込むよう度々アドバイスを受けた。この点、筆者は手紙や公文書を普段の研究で用いていたため、限られた情報しか書いていないような視覚的な資料から何を伝えられるのか懐疑的であったが、出来上がった展示を見るとその考えは一変した。この部分に関しては後述したい。

アドバイスに従って灘ボランティア資料を再度調査したところ、マジックで「通行不可」と大きく書かれた張り紙や、乗用車の通行可能な道を調べたマップが見つかった。一見関係のなさそうなこれらの資料を並べると、「歩き隊」や「バイク隊」の機動力を活かした情報収集と、地元の混乱していた交通状況を集約してボランティアが情報発信していた姿がわかる。これらに加え、被災者の具体的なニーズを記載した「歩き隊」の情報リストも並べることで、実働部隊が被災者に寄り添い、丹念に情報を集めようとした姿が読み取れた。資料一つ一つからは伝えられることが少なくても、それらを併せて展示することで活動の様子がありありと浮かび上がると実感した。

（三）解説文の作成とその難しさ

さて、展示資料が固まり、いよいよ解説文を作成する段階となった。最終的に筆者が担当する展示資料は、歩き隊情報リスト、「通行不可」張り紙、乗用車不可能マップ、灘ボランティア新聞（複数号）の四種となり、これらの解説文をまとめて二

五〇〇三〇〇字に収めなければならない。

次に示すのは、解説文初稿である（ゼミ報告レジュメより）。

震災後、神戸市灘区では、市民や学生の有志による「灘ボランティア」が活動した。同区を流れる都賀川のほとりにテントを張り拠点とした。バイク隊は被災地をバイクで巡りながら情報の収集、調査を行い、『灘ボランティア新聞』を通して発信した。歩き隊も同様に被災地を周り、被災者のニーズを聞き出したり軽作業を行ったりした。本資料は『灘ボランティア新聞』及び歩き隊情報リストで、彼らの活動の一端が見て取れる。初期には新聞の名称や発行者名の揺れが生じており、活動をする中で変化し定まっていた過程が読み取れる。

初稿では「歩き隊」や「バイク隊」についての説明に多くが割かれ、また資料そのものの説明に留まり、各事柄が羅列された印象が強かった。ゼミでは、この文案を実際の展示資料と突き合わせながら皆で議論し、推敲を重ねていった。これを踏まえた解説文の完成稿が次である。

神戸市灘区では、都賀川のほとりに張ったテントを拠点に、市民や学生の有志による「灘ボランティア」が活動した。「バ

イク隊」や「歩き隊」などを編制し、被災地を巡りながら被災者のニーズを「情報リスト」に集約して支援につなげた。機動力を活かし、生活情報や通行止め箇所などの地域情報を丹念にすくい上げ、『灘ボランティア新聞』を作成して発信。この新聞からは、当初まちまちだった団体や新聞の呼び名が、活動のなかで定まっていた過程が読み取れる。行政の支援よりも市民の行動が先行した当時のボランティアのあり方がわかる。

完成稿では冗長な説明が削ぎ落とされとともに、灘ボランティアの活動を示すなかに「バイク隊」や「歩き隊」を織り込んで実働部隊の存在を強調し、各展示資料を一連のものとして示す構成となった。また、最後の一文を加えることで、当時のボランティアの特徴を示そうとした。

ここに、解説文づくりの難しさがあると実感した。少ない文字数に情報を絞り込むとともに、何を強調して伝えるかが問われた。展示資料の選定に関しても同様であるが、伝えたいことを全て盛り込むのではなく、核を一つ決めてその情報に焦点を当てることが展示においては必要となることがわかった。灘ボランティアに関しては資料が豊富に残されていたため、正しい展示内容に盛り込みたくなるが、ポイントを絞っていく点が難しかったように感じる。

以上、筆者の担当部分が中心となったが、展示ならではの難しさに直面しながら練り上げていった過程を振り返った。

三 展示を振り返って

ここまで筆者や私たち神戸大学の学生の経験が中心だったが、最後に展示全体を通しての所感を述べたい。

(一) 展示の手法と視覚情報

一般的に「阪神淡路大震災の展示」と聞くと、震災の被害に注目が集まる傾向にある。これに対し、本展では阪神・淡路大震災の「情報」に注目して構成することで、震災当時情報がどう伝えられたか、未来に向けて体験をどう伝えるかという新しい視点を提供できたと考える。

また、展示全体を振り返って、視覚情報の重要性を感じた。普段研究で用いる資料は文章だらけのことが多く、視覚的な資料から私たちの考えたことが十分伝わるか懐疑的であった。しかし、展示を見て今でも思い浮かぶのは、拡大したサンテレビ番組編成表（第二章）と、震災の被害を戦争になぞらえた安水稔和氏の詩（第四章）である。前者は、地震発生前日と比較できる編成表が視覚化されることで、地元報道局としての使命感が改めて伝わってきた。後者は、壁一面のパナーに大きく映し

出された詩が、強く印象に残っている。優れた解説を付しても、観覧者に記憶されなければ意味がない。印象に残った資料と併せて展示内容を想起してもらおうという意味でも、視覚に訴えかける資料は展示において重要な要素だと実感した。

この点で、震災体験が様々な媒体を通して語り継がれていることが展示された第四章は、印象深いものだった。報道内容を参照しつつ、自分の体験を織り交ぜて描いた桜井健氏の紙芝居からは、個人の経験だけではなく、当時の報道を第三者の目線を通して知ることができ、大変興味深かった。また、神戸大学附属図書館震災文庫でも閲覧できる大木本美通氏の写真が紹介された。震災直後から復興に至るまでの神戸の様子が撮影されており、筆者も大学で震災に関わるようになってから何度も写真を見したが、視覚的に震災後の街の様子がありありとわかる。震災を知らない世代にとって、自分の住んでいる街がどのように現在の姿に至ったのかを追うことは、震災への関心の第一歩として有効だと考えた。

もう一点、展示を見て思ったことは、資料に触れられる機会が欲しかった点である。もちろん、オリジナルの一次資料もあり、全てに直接触れることが難しいのは承知している。しかし、阪神・淡路大震災は現代と同時代的な事象であり、他時代の展示と大きく異なると思う。展示資料には体験談や当時を振り返った本も含まれていたため、それらをじっくり読めるよう、

読書コーナーを設けていれば、より当時の様子を深く伝えられたのではないかと思考するところである。

(二) 展示から見る復興過程における市民と行政の関係

本展の展示内容から、震災直後から復興に向かう過程での市民の多面的な動きを再認識した。震災直後から復興に向かう期間は、震災後一週間の「救命救急期」、一月末から三月末の「避難救援期」、四月以降の「生活再建期」の三つに分けられる^③。本展の第三章では、「灘ボランティア」や「中央区ボランティア」などが「避難救援期」に活動したことが示された。さらに時を経て日常的な地域づくりに関わるボランティア団体が登場した。東灘区では、一九九六年一〇月に「コミュニティ・サポートセンター神戸」(CS神戸)が発足し、地域の自立と共生を理念にコミュニティづくりを支援した。また、学生ボランティア撤退後、自らの活動記録を残す目的で「震災・活動記録室」が発足し、資料を現在に伝えている。

これらの資料からは、地域の特色に合わせて震災直後の応急支援を行った人びと、時期を経て日常を取り戻すことに軸足を移し、さらには次世代に資料を残そうとした人びとの姿とその努力が読み取れるのではないだろうか。ボランティア活動における震災当時と未来に向けた横と縦の時間軸を意識することができた。

続いて、同じく第三章の神戸空港建設をめぐる展示では、市民と行政の関係性が問われた。市民が建設反対の立場からマンガなどを交えて空港建設を検証した資料と、神戸市が空港の必要性を経済効果や市民生活の復興の観点から説いた資料が示された。神戸空港の建設は震災以前からの計画であったが、行政が掲げる経済活動優先の「創造的復興」に空港建設が位置づけられたことに対し、市民の不満が高まり、検証のための情報交換が活発に行われた状況が窺える。先ほどのボランティアの話に少し触れると、新学期の開始に伴って活動を縮小せざるをえなくなった団体が行政にその活動を託す場合があった一方で、経済復興の面では行政の復興政策に疑問を抱き検証しようとする市民も多く存在し、その対比に興味深さを覚えた。この展示の直後には、神戸市長田区久二塚地区の再開発と地元住民が組織した「まちづくり協議会」の事例が紹介された。

以上の一連の展示から、被災者の生活ニーズに応えるボランティア活動においては、行政との親和性を高める傾向が見られたが、街の復興には市民と行政の双方向的な意見の交換や住民の参加が必要だったと考えた。

おわりに

以上、本稿では特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせ

る——情報と通信の1990年代——」の展示内容、資料選定の過程や所感を筆者の経験を中心に取り留めもなく綴った。

通常の近代史研究で扱う資料は、その資料の経緯や情報がある程度整理されていることが多い。しかし震災資料は情報が不明瞭な場合も多く、他の資料と突き合わせながら理解を深める過程が多かったように思う。関連する資料を見ていくことで、初めて経緯や当時の資料作成の状況等がわかることが多々あった。また、現代史の最大の特徴ともいえるが、震災当事者の話を聞きながら資料理解を深められる点も大きく異なる。実際に筆者はボランティアの状況をよく知る方からのお話により、「灘ボランティア」が学生の熱意が先行した団体であることを知った。この前提となる理解の有無によって、資料の捉え方も大きく変わってくるのではないだろうか。

震災の当事者も多いなか、震災を知らない世代として展示を作っていくことに緊張を感じる場面も多くあった。特に筆者の班が関わったボランティアは、当事者が一番詳しいと思われるため、展示をどう受け止められるのか不安に思っていた。残された資料から、本稿に綴ったような資料の解釈をしたが、その意図が本展を通して伝わっていれば嬉しい限りである。

震災展示は、一般的に防災教育の側面が強くなる傾向があるが、本展は「歴史博物館で震災を展示する」ことを問うた内容となり、その試みは画期的であったと思う。その反面、防災教

育を期待した来場者は戸惑ったかもしれないが、震災から三〇年が経ち、当時をいかに捉え、どう解釈するのが、すでに歴史学の対象となつていることを広く伝えられたのではないだろうか。本展が、様々な視点・分野から阪神・淡路大震災の研究が進められるきっかけになることを願う。

最後に、大学生活ではなかなか体験できない、展示に携わるという大変貴重な経験ができた。展示に関わって初めて学んだことも多く大変だったが、その成果を来場者の方々に見ていただけたのは嬉しかった。貴重な機会を提供いただいた吉原学芸員、吉川先生をはじめ、本展に関わった全ての方々に御礼を申し上げます。

註

- (1) 兵庫県立歴史博物館編『阪神・淡路大震災三〇年特別展図録 阪神・淡路大震災を伝える・知らせる——情報と通信の一九九〇年代——』（兵庫県立歴史博物館、二〇二五年）
- (2) 「灘ボランティア」資料は、震災・まちのアーカイブが所蔵し、ゼミのために大学で一定期間借用していた。
- (3) 山下祐介・菅磨志保『震災ボランティアの社会学』（ミネルヴァ書房、二〇〇二年）